

# 黒人研究の会会報

*Japan Black Studies Association Newsletter No.66*  
(December 20, 2007)

第66号 2007年12月20日

## 例会発表要旨

7月例会 2007年7月14日 神戸市外国語大学

### ① リンチの歴史化におけるBearing Witnessの問題について

坂下 史子

本報告では、リンチの歴史を記憶・記録する際に生じるBearing Witness(目撃者となること)の問題を考察した。ここでは実際のリンチ現場を目撃することだけでなく、リンチを描写した新聞記事や写真、文学や芸術作品などの文化的表象を目にすることも広義に含み、対象を黒人に対するリンチに限定して検討した。

報告ではまずBearing Witnessの相反する機能を確認した。一方で暴徒はリンチを儀礼的見世物として消費し、それを見せしめとして強制的に黒人に目撃させることで、白人優位主義的言説や社会秩序を維持した(これらはリンチ写真や新聞記事にリンチの光景を再生産することで一層強化された)。他方、反リンチ運動家たちは、リンチ写真・新聞記事の転用や犠牲者の身体の提示(例えばエメット・ティルの葬儀など)、生存者によるリンチの

体験談などを通じてその惨状を世間に知らせ、同時代の白人優位主義的言説の再生産やリンチの記憶の歴史上からの抹殺に抵抗した。

こうした黒人の抵抗は、暴力の対象たる黒人の身体やその表象を通じてしか行われ得なかったため、ジレンマも内包していた。リンチ写真や新聞記事の転用においては、それらに内在する元来の白人優位主義的言説や見世物的視点を再生産する恐れがあり、犠牲者の身体提示や生存者の体験談においては、彼ら自身が再び(または繰り返し)ある種の見世物として消費される危険性を孕んでいたのである。

こうした危惧から、リンチの歴史に携わる研究者の間でも、Bearing Witnessの問題に関しては意見が分かれている。リンチの記憶を語り伝えるためには暴力を目撃することが不可避であるという立場から、見世物的な眼差しを再生産しかねない人種暴力などの描写は一切研究に引用しないという立場、また、研究者自身もこうした暴力の再生産と共犯関係にあることを認めた上で、リンチの表象を再文脈化することで見世物的な暴力の再生産を避けようとする努力など、様々な議論と実践が行われている。

9月例会 2007年9月22日 京都キャンパスプラザ

① アンリ・ロペス(Henri Lopes)の短篇集Tribaliques(1971)におけるリアリズム

北島 義信

アンリ・ロペスは、1937年、現在のコンゴ民主共和国キンシャサ(旧レオポルドビル)に生まれ、フランスの大学へ留学した。フランスでは急進左翼の「フランス在住黒人アフリカ人学生同盟(FEANF)」の指導者として活躍し、大学院を終了後、コンゴへ帰国した。帰国後、プラザビルにある「ブラックアフリカ高等師範学校」歴史学科主任を経て、文部大臣、首相を歴任後、ユネスコ事務局次長となる。1972年、短篇集Tribaliquesによって、黒人アフリカ文学大賞(Grand Prix Littéraire de l' Afrique Noire)を受賞。

アンリ・ロペスは「アフリカ人が独立を強固なものにし、平等で現代的国家に向かって前進するためには、自らの弱点を認識し、社会の構造を変えねばならない」という立場に立ち、すべてのアフリカ人に語りかけ、彼らの意識を目覚めそうと試みる。彼は文学を政治的痔核を目覚めさせる手段と見ており、また作家とは他者を行動へと誘う活動家であらねばならぬと考えている。この点では、彼は伝統的なアフリカ人作家の立場に立っているといえる。これらの立場を鮮明に示しているのが、彼の処女作Tribaliquesである。

アフリカの根本問題は「部族主義」だという根本的に間違った見解が今日でも、存在しているが、アンリ・ロペスはこのような見解を明確に批判している。彼はアフリカ世界とコンゴに共通する現代の複合的諸課題を皮肉を込めてTribaliquesと呼び、その克服の方向性を読者に考えさせる。都市に焦点をあてた8編の短篇から構成されるこの短篇小説集は、日常的にどこにでもある問題を切り口にして、問題の本質をえぐり、差別・格差社会の底辺に置かれた主人公の意識の深化（「前借り」）、現状肯定から現状批判への主体的な意識の変化（「黒人」「陰謀」）、政治変革の行動への決意とそのすがすがしさ（「ウイスキー」）等をリアルに示すことによって、読者に自覚化を力強く働きかけている。

10月例会 2007年10月27日 神戸市外国語大学

① フィラデルフィア報告：ASA年次大会参加と黒人教会の現状について  
山下 弥生

2007年10月11日から14日まで、ペンシルバニア州フィラデルフィアのマリオットホテルで行われたA. S. A. (American Studies Association) の年度年次大会に参加した。今年の大会テーマは“American Aquil: Transphemispheric Visions and Community Connections”で、グローバリゼーションとグローカリゼーションの両方を意識したうえで各地域におけるアメリカの文化、歴史、エスニシティなどを幅広い角度から再検討しようという趣旨がうかがわれた。4日間にわたり、ホテル宴会場の4フロアを貸切って行われた大規模な会議ではあったが、基調講演やゲストスピーカーといった全体的な発表はなく、それぞれのセッションが各部屋で独立した発表会として行われた。ハンドアウトは一切準備されておらず、参考文献等の情報を得られなかったことが残念ではあったが、現在のアメリカにおける黒人研究の動向や研究材料がわかったことは有意義だった。次回は発表者として参加したい。

滞在中に時間の許す限り黒人教会を見学した。ハーレムではケイナン・バプテスト・チャーチを訪れ、日曜礼拝に参加した。キング牧師も訪れ説教をしたこの教会は、熱狂的なゴスペル音楽が有名で地元の信者だけでなく、外国からの観光客も多く訪れる。音楽と説教が中心の礼拝は、私たちが黒人教会として見たいものをすべて見せてくれる。是非、日曜礼拝を体験されることをお勧めしたい。(Canaan Baptist Church of Christ, 132 W 116th St, New York, NY)フィラデルフィアにあるA. M. E. マザー・ベゼル・チャーチは公的記録に残っている中ではアメリカで一番古いとされている黒人教会である。映画館を再利用したケイナンB.C.とは対照的に、豪華なステンドグラスやパイプオルガンがあり、地下は創設者であるリチャード・アレンの博物館になっている。礼拝で歌われる歌はゴスペルというよりも上

品な賛美歌という印象のほうが強い。フィラデルフィアにはA. M. E.マザー・ベゼル以外にも1790年代に創設された黒人教会がいくつかある。例えば、アフリカン・ゾアー・メソヂスト・チャーチやファースト・アフリカン・チャーチである。ファースト・アフリカン・チャーチでは、洗礼を行うためのpoolを見ることもできた。いずれの黒人教会も地域における現実的役割と黒人の歴史と文化を継承していくための活動をどのようにバランスよく実行していくかがひとつの課題であると思われた。

## ② 19世紀合衆国南部の社会統制

### ——ルイジアナ州「リビングストーン・コード」をめぐる法典化運動の功罪

高廣凡子

本発表では、19世紀前半のルイジアナ州における社会統制に関する研究の途中経過を報告した。

まず本研究では19世紀前半のルイジアナ州の社会統制観を表していると思われる法典化運動に着目し、その展開の背景と過程を明らかにすることで、この時期にいかなる力がどんな社会統制を必要としたかということを解明した。その結果まず、合衆国が国家を樹立する過渡期にルイジアナで法典運動による北部化を通じた統合の試みがあったという点が明らかとなった。この際には、北部の刑罰制度の状況や社会統制観に留意しながら分析したが、このことによってルイジアナでは功利主義の影響を受けた北部的な刑罰制度の導入が試みられることになったことがわかった。

つぎに法典化運動の失敗がルイジアナで近代的刑罰不採択に繋がったという点を明らかにし、このことが、現在のルイジアナにおける前近代的刑罰の残存の一つの要因になっていることを示唆した。本報告ではこの失敗の原因が奴隷制と関連あることに触れたが、実証までは至らず、課題として残った。

11月例会 2007年11月24日 大阪工業大学

## ①アメリカ女性史における黒人女性アボリショニストの歴史的位置づけ

### ——ネル・アーヴィン・ペインター(Nell Irvin Painter)のソジャーナー・トゥルース論から始めて

佐藤恵津子

ネル・アーヴィン・ペインターによる黒人女性アボリショニスト、ソジャーナー・トゥルース論は、アフリカン・アメリカン女性の視点から従来の「女性史」記述のあり方に再考を迫っている。トゥルースは、彼女が生きた時代から現代に至るまで、さまざまなしかたで強い女性を表わすフェミニスト・シンボルとして歴史に記述されてきた。ペインターは長年のシンボル化が一様でないとしたうえで(時代によって、黒人性の消去もあれば強調もある)、シンボル化の過程で行なわれた創作や単純化、歪曲を明らかにしていく。そしてシンボル化が、元奴隷であったこの黒人女性の複雑な生についての理解につながらないばかりか、歴史記述の主体となるのが難しかった者のイメージを消費、利用する行為であるという批判を展開する。

何が歴史に記述されるか、されないかを決めているのは力である。1960年代からの第二波フェミニズムと連動してアメリカで始まった新しい女性史研究(いわゆるherstory writing)は、父権主義的歴史記述に挑戦し、記述の力を女性が握り、「女性の視点」で歴史を書くという試みであった。しかし、herstory記述の中心にいたのは圧倒的に白人女性であった。ペインターのトゥルース論は、性別だけでなく人種、身分の位置と社会的、経済的、文化的な諸条件の重なりの中にある人物が、「強い女性」や「強い黒人女性」という単純な像に還元しえない複雑さを生きたことを明らかにする。シンボル化の過程に抵抗し、herstory writingに見られる記述の特権を批判するものである。

## ②“East Asia, Africa, and the African Diaspora: A Historical Perspective”

——第5回国際アジア研究者会議(マレーシア)参加報告

古川 哲史

本例会では、発表者が参加したマレーシアで開催の第5回国際アジア研究者会議(ICA S: The International Convention of Asia Scholars)の様子、同会議へ参加した意図、“East Asia, Africa, and the African Diaspora: A Historical Perspective”と題した発表内容、そしてその後の質疑応答などを紹介した。

国際アジア研究者会議は、各国のアジア研究に携わる研究者が、国際的に交流して学問を発展させようと組織したものである。1998年に第1回の会議がオランダのライデンで開催され、以降、2001年にベルリン、2003年にシンガポール、2005年に上海と開かれた。今回の第5回はマレーシアのクアラルンプールで、8月2日から5日までの4日間にわたって開催された。第4回大会は52カ国、1200人の参加と言われ、今回は60カ国、1500人以上が参加と渡航前に聞いた。アジア研究の学術集会では、世界一の規模である。

発表者は初日の“Diaspora”のパネルに組み込まれており、インド人やスウェーデン人の研究者らと発表をおこなった。古代から現在までの東アジアとアフリカ、アフリカ系アメリカとの関係の事例などに言及しつつ、本テーマの学問的・社会的意義、あるいは現代的重要性を述べた。本発表は、グローバルな視座のもと東アジアとアフリカおよびアフリカン・ディアスポラの関係史を構築する初期段階の作業であり、会議参加の意図には、アジア研究の分野における共同研究者を探す目的もあった。

## 会員からの投稿

Barack Obama上院議員に関する07.7.21付ワシントン・ポストの記事

須田 稔

Colbert I. Kingという人のAbolitionist, Then and Now と題する文章を見た。大半を訳出してみる。「首都ワシントンは、何世紀もの流れが1日という時間に圧縮される場所の一つだ。この水曜日が1例である。絶え間なくニュースを生み出す都会では呆気なく見過ごされる共通点のある二つの出来事があった。一つは、奴隷制廃止主義者Leonard A. Grimesの顕彰事業、もう一つは、Barack Obama上院議員の都市政策案の発表。

前者は22番H通北西角のGeorge Washington Universityのキャンパス。学長Stephen Trachtenberg、名誉教授で大使のRonald Palmerを筆頭におよそ50人の学者と来賓が参集して、ヴァージニアで自由人として生れ、反奴隷制活動家、地下鉄道の組織者となったグリムズの顕彰飾り板を献呈したのだ。

グリムズが1836年から1846年まで住んでいた家が、いま顕彰板が地面に埋め込まれた角っこにあった。もっとも、彼の家は住居以上の場所だった。

1830年代のワシントンには、奴隷収容の檻、奴隷貿易商人、奴隷競売所、奴隷主人が存在した。グリムズは果敢な抵抗として、自分のFoggy Bottomの居宅をヴァージニアからの逃亡奴隷の安全の家に使った。地下鉄道史家Hilary Russellによると、逃亡奴隷が自由を希求する北行きで最初に停車する所はワシントンであった。

グリムズの生業は馬車屋であったが、地下鉄道の活動を隠す狙い。多くの奴隷を自由の身へと運搬したが、過酷な犠牲を払ってのことだった。

奴隷の女性とその6人の子どもがLoudoun Countyから逃亡するのを援助したあと、グリムズはワシントンで逮捕され、1840年から2年間リッチモンドの刑務所で重労働に服役した。しかし、投獄もその反奴隷制の精神を萎縮させなかった。1846年、彼と家族はマサチューセッツのNew Bedfordへ転住、奴隷制廃止主義者として牧師として活動を続けた。1848年ボストンに落ち着き、教会を設立、逃亡奴隷の碇泊港とした。

グリムズは、ヴァージニアの史家Deborah Leelによると、黒人・白人・先住民の血を享けていた。肌は白人で通るほど白かったとする説もあるが、彼の自己認識は黒人で、自由を奪われた黒人を見ると行動せずにはおれなかったのだ。

グリムズが顕彰されているころ、オバマはAnacostia Riverの東、すべての子どもが貧困ライン以下で暮らし、多くが学校を卒業しない、仕事が見つからない子はさらに多く、ギャングに入る子もあり、銃で生命を失う子もいる、ワシントンのそんな地域にいた。

オバマはそんな地域を、一歩踏み出す前に子どもの運命は決められていて、その未来は生まれ落ちた狭い地域に幽閉される場所と表現する。グリムズが刻苦したワシントンと変わるところがない。

グリムズの敵は奴隷制だった。1世紀以上経って、オバマのそれは都市の貧困なのだ。が、オバマが貧困を「脱出は極めて困難で、至る所にある」というとき、それは奴隷制みたいなものだ。議事堂から10分以内に19世紀のワシントンがあるのだ。グリムズが死ぬまでおこなった活動、それは今、オバマとわれわれが為すべきことなのだ。

.....

7.22付『毎日』の「本の批評と紹介」欄に、アントニア・フェリックス著『プライドと情熱 ライス国務長官物語』（角川学芸出版）が載った。政治家・国際政治学者で、ピアノ演奏やフィギュアスケートの技量はプロ並みという。アフリカ系アメリカ人女性で初の国務長官だが、前長官パウエルのもそれだが、アメリカの今日の貧困と人種差別をどう観ているのだろう。

（立命館大学名誉教授）

南部における奴隷売買を扱った歴史小説  
——ジュリアス・レスター（金利光訳）『私が売られた日』の紹介

古川 博巳

昨年夏にジュリアス・レスター著、金利光（キム・イグアン）訳の『私が売られた日』（東京・あすなろ書房、2006年7月）が出版された。会誌76号の〈黒人研究書架〉では収録されて

いないので、追加の趣旨もかねて紹介しておきたい。原書はJulius Lester, Days of Tears (Hyperion Books, 2005) で、同書は2006年度のコレッタ・スコット・キング賞を受賞した作品である。

訳書のカバーには「異色の歴史小説」とあるが、ジョージア州の大農園の奴隷を大量売買した史実にもとづく13幕からなるドラマ仕立ての文学作品である。作品は1859年、同州サバナの港町で実際にあった史上最大の奴隷売買市を下敷きにしている。これは賭け事で没落した農園主ピラス・バトラーが、所有の奴隷の大半を売りに出さざるを得なくなって起きた農園主一家の悲劇と、散りじりに売り払われた奴隷の後日談を扱っている。競りが行われた二日間、稀に見る篠突く雨が続き「嘆きのとき」として語り継がれたという。原題『涙雨の日々』の由来である。この農園主と結婚したのは、自立の女性として知られるイギリスの女優ファニー・ケンブルで、プランテーション生活の実情を知った彼女は離婚し、奴隷制廃止を訴えるようになった。それは、彼女の『ジョージアの大農園で過ごした日々の記録』という著作によって知られている。レスターの作品は、これらの史実の上に組み立てられたフィクションであり、黒人・白人の登場人物にかかわる、南北戦争の10余年前に始まり、解放後のそれぞれの老年期におよぶ感動的な物語となっている。

原著者ジュリアス・レスターは1939年に生まれ、フィスク大学で学び、これまでに奴隷体験記集である『奴隷とは』(木島始・黄寅秀訳、岩波新書、1970年)などが日本でも訳出されている。今回の作品の訳者は、京都大学文学部の英米学科を卒業した在日韓国人であり、本書の他にも著書や訳書がある。

(黒人研究の会・  
顧問)

アメリカでも推されるアフリカ作家たち

小林 信次郎

アフリカ文学の研究者S・A・オブライエンは『アフリカ文学への教師用手引書』(1998)で、アメリカの学生用に6人のアフリカ作家を選んで解説して注目された。約10年後Hip Hop音楽の紹介者でもある、T・G・スペイディは「SCOOP U.S.A. '07. 10. 5」で、オブライエンを強く支持して、全米の学校でアフリカ文学と歴史を教えることにより、黒人の文化遺産を継承しなければならない旨記している。次にその6人のアフリカ作家と作品とを列挙してみる。

チヌア・アチェベ (ナイジェリア 1930～)

『崩れゆく絆』('58年) 古川博巳訳 門土社 '77年。

ブチ・エメチェッタ（ナイジェリア 1944～）  
『母であることの喜び』（'79年）邦訳書なし。  
オコト・パ・ビテック（ウガンダ 1931～82）  
『ラウィノの歌』（'69年）『オチョルの歌』（'70年）邦訳書なし。  
ゲギ・ワ・ジオンゴ（ケニア 1938～）  
『一粒の麦』（'67年）小林信次郎訳 門土社 '81年。  
ベッシー・ヘッド（南アフリカ 1934～85）  
『雨雲のわく時』（'68年）邦訳書なし。  
アレックス・ラ・グーマ（南アフリカ 1925～85）  
『モズが鳴くとき』（'79年）邦訳書なし。

選出された6人の作者は、地域的にはサハラ以南のみで、アラブ圏からは選出されていない。性別ではブチ・エメチェッタとベッシー・ヘッドの2人が女性で、残りの4人は男性作家である。実質的な作家活動面からみると、1950年代以後で、それ以前の多くの作家が全く俎上に載っていない。アフリカからの4人ものノーベル賞作家も1人としてリスト・アップされていない。しかし、現在のアメリカ黒人の学生達が手軽に入手でき、かつ関心の持てるアフリカ作家や作品といえば、オブライエンやスペエイディが推挙している6人になるように思える。事実、ジンバブエ・ブック・フェアが多くの研究者、作家、出版者の協力のもと選出した20世紀のアフリカの名著100作品の著者にラ・グーマを除く5人が入っているからでもある。いずれにしても、アメリカ黒人のアフリカ意識が連帯感にまで強まりつつある一面を垣間見せられたものであった。

（大阪工業大学名誉教授）

## 海外からの情報

トニ・モリスン学会(アメリカ)より

Call for Papers: The Fifth Biennial Conference, Toni Morrison and Modernism

The Toni Morrison Society is pleased to announce its Fifth Biennial Conference,  
Toni Morrison  
and Modernism. The Fifth Biennial Conference will explore Modernism from many  
perspectives  
in the fiction of Toni Morrison. Expanding on the traditional notions of European and  
American  
Modernism, this conference will highlight diasporic notions of  
Modernism. Specifically, it will examine how the tragic imperative of enslaved  
Africans in the United States to “make themselves new” in order to survive  
predated and, in many ways, countered the alienating impulses of Modernism of the  
late 19th and early 20th centuries. This diasporic approach to Modernism is  
particularly fitting for this conference, given that 2008 marks the 200th anniversary  
of the U.S. ban on the Transatlantic Slave Trade. Our setting in Charleston, South  
Carolina, the largest port of entry of enslaved Africans and a site rich in the history,  
art, and music of the Gullah culture, offers a number of important ways to explore  
how Africans recreated themselves in the new world.  
Abstracts should be no more than one page in length and should be e-mailed or  
postmarked by  
January 15, 2008. Please submit abstracts to [tmsociety@aol.com](mailto:tmsociety@aol.com) or Dr. Alma Jean  
Billingslea,  
Department of English, Box 254, Spelman College, Spelman Lane, Atlanta, Georgia  
30311.

## 入 会 者

額田 康子 氏

大阪府立大学人間社会学研究科博士後期課程所属。アフリカ研究。アフリカ人を他者化する植民地支配のなかで、人々がどのようにして自己の視点を回復し、植民地主義と闘う運動を組織していったかに興味があります。現在は、ケニアの1920年代末から1930年

はじめに行われたキリスト教宣教師による女性割礼禁止キャンペーンとそれに対する抵抗運動の意義を考えています。

吉田 藍 氏

現在、東北大学国際文化研究科地域文化論比較文化論講座博士前期課程に在学しています。「銀幕に映しだされた黒人像—アメリカ文化史からみたスパイク・リー」という仮題目のもと、修士論文を執筆中です。黒人研究に関して幅広い知識を吸収したいと思い、入会させていただきました。宜しくお願い致します。

西島 佑美 氏

同志社大学アメリカ研究科博士後期課程所属

松本 祥志 氏

札幌学院大学法学部教員。国際法とアフリカ法を専門にしており、アフリカの共同体における自他関係を参考に、国際法が遵守されるような「もうひとつの世界」の構築を追究しています。最近「ウブントウ ubuntu」のような哲学原理に着目し、『アフリカからの贈り物』を自費出版しました。研究室を事務所に行っている NGO「札幌国際連帯研究会(SIIS)」で扱っています。

佐竹 純子 氏

プール学院大学短期大学部教員。

(順不同)

## 会 員 消 息

風呂本惇子 氏

論文「先祖と向き合う姿勢——『ビラヴィド』とカリブ系アフロ・アメリカ作家」を吉田迪子氏編著『ビラヴィド』(ミネルヴァ書房、2007年7月)に発表。

古川 哲史 氏

5月に長崎で開催された日本アフリカ学会・第44回学術大会の公開シンポジウム「アフリカと日本の出会い—長崎出島を介して」において、パネリストの一人として「日本—アフリカ交渉史の諸相を考える—いくつかの課題と展望」と題した話をする。また、8月にはマレーシアのクアラルンプールで開催された、アジア研究の分野では世界最大規模の集まりとなる「第5回国際アジア研究者会議」において、“East Asia, Africa, and the African Diaspora: A Historical Perspective” のタイトルで発表をおこなう。

(順不同)

## 編集後記

会報65号までを編集された鉄井孝司先生から引継ぎ、今号より私、時里祐子が編集を担当させていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

前号が発行された7月のことですが、大阪で行われたJapan Blues & Soul Carnivalに、ブルース・ウーマン、Koko Taylorのステージを観にいきました。1935年テネシー州メンフィスの小作人の家庭に生まれたココ・テイラーは、幼いころに母親を亡くし、農場の手伝いをしながら教会でゴスペルを歌う少女時代を過ごします。結婚後、仕事を求めてシカゴへ移住し、メイドの仕事をしながらクラブで歌手として活動したのち、1963年、名門チェス・レコードと契約、リズム&ブルース部門で全米チャート4位を記録する“Wang Dang Doodle”をリリースします。「クィーン・オブ・ザ・ブルース」の愛称で親しまれた彼女は、近年、体調不良が心配されたものの、今年4月79歳にして7年ぶりにアルバムを発表しました。大学時代、黒人霊歌の合唱団で出会った両親の影響で幼少の頃から彼女のレコードを耳にして過ごしましたが、レコードとは全く違う、まさに魂に呼びかけるような生の歌声に目頭が熱くなり、また、歌の合間、用意された椅子にも腰を下ろさず聴衆に呼びかける姿や、「クィーン・ココ！」と呼びかけた私と握手をしてくれた手の感触から20世紀を歌い抜いてきた彼女の人生の重みが伝わってくるようでした。黒人文化を魂から湧き出るものと言えばプリミティブ礼賛のようで語弊があるかもしれませんが、やはり圧倒的なその力への感動がこの会の

軸となっているのだろうと、初めての会報編集作業で会員の方々の原稿を拝読しながら感じ、再び、手にココ・テイラーの手のひらの厚みが蘇ってきました。

<編集> 黒人研究会・編集部  
〒603-8143 京都市北区小山上総町  
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

<編集者> 時里祐子